第 195 回森で遊ぶ会『森町・町民の森観察会』実施報告書

1．実施日時：令和 5 年 4 月 24 日(月) 8:00～17:00

2．実施場所：森町・町民の森

3．参加者：　21 名

4．インストラクター：（幹事） 小嶋、高橋
　　（アシスト会員） 青野、越智、小久保、佐野、杉山、矢下

5．実施状況

当日は、薄曇りでやや肌寒くハルリンドウやヒメハギなどの小さな草花が花を開いてくれているか心配でしたが、現地に到着すると薄日が出てきてなんとか開花した姿を観ることができました。しかし、残念ながら目玉のクロバイの白い花が雪のように木を覆う景観は観ることができませんでした。でも、でもモウセンゴケやトウカイコモウセンゴケなど珍しい植物を確認できました。それでは、4 班に分けた各班の様子を以下ご紹介します。

<1 班> (担当：小久保、青野)

第 1 班は、ほぼ毎回参加していただいている方など、ベテランの多い班だった。そこでややマニアックなガイドをすることにした。例えば、まず互いによく似たクロバイとヒサカキの葉を並べて見比べてもらった。『うーん、よく似ている…』『クロバイの方がちょっと先端が長いかな？』等々の声。そこで、『ヒサカキは葉の先端の中央が僅かに凹んでおり、クロバイの葉柄の色が黒っぽいのが大きな違いです』などと識別ポイントを話し、次々に現れるヒサカキとクロバイを一本ずつ見分けてもらった。この森には無数のクロバイがあって、ヒサカキと並んで生えていたりする。クロバイに花が残っていれば一目瞭然だが、林床の幼木になるとなかなか見分けにくい。それでも皆さんだんだん目が慣れてきて、ほぼ的確に区別ができるようになってきた。そこで次に、これも一見よく似たシイノキの葉も加えて、『さあ、今度はこれは？』とクイズばりに。皆さん『うーん、また頭がこんがらかってきた』などと言いながらも、この手の地味な常緑樹の見分けができるようになってまんざらでもない様子だった。

また、スマホのカメラに拡大レンズを付けてルーペ代わりにし、植物の細部を観ていただいた。例えば、ソメイヨシノとヤマザクラの葉柄や鋸歯を拡大して観比べ、毛の有無や鋸歯の形状の違いから『サクラの種類を葉で見分ける』方法について話した。ベテランの方々にも初めての経験で、喜んでもらえたようだ。またコナラの虫こぶ、ナラメリンゴフシがあったので、その断面を拡大して観察してもらった。中に潜むタマバチの幼虫と卵がしっかりと見え、皆さんの驚きの声が上がった。

(小久保 記)

<2 班> (担当：杉山、矢下)

薄曇りの空の下、草花の開花状況の心配をよそに、私たちの期待に十分応えてくれる観察会となった。花や葉などじっくり観察して歩く。

ハルリンドウの雌雄期の状態の花を比較し、自家受粉を避ける知恵を知る。タチシオデの雄花・雌花の確認とともに、別名と秋田民謡のかかわりを紹介。ツクバネウツギやヤマツツジのガイドマークの役割や受粉の仕方を学ぶ。また、ガンピが開花していたので和紙の 3 大原料についても解説した。

葉の比較も行った。クロバイ、ヒサカキ、シャシャンボ似た者同士の葉だが、見分けのポイントを説明し、以後同定に活用する。更に、クロバイの根の張り方が、乾燥地に適応しているためこの地に多いことを説明する。また、「コシダのあるところネジキあり。」この言葉の意味を説明し、ともに乾燥地である指標植物となっていることを伝えた。

下見では咲いていなかったジャケツイバラが咲いていた。参加者から、「マメ科なのに蝶形花じゃないように見えるよ。」という指摘で、双眼鏡を覗くと、確かに 5 弁花であった。参加者の鋭い観察眼に感心した次第。 グリーンガーデンで昼食後、ヤマツツジを背景に可愛いガンピの花が咲いていたので、みんなで撮影会。その後もノウサギの糞を見たり触ったりワイワイしながら、楽しく南ゲートまで戻った。

今回は、乾燥地の植物観察に加え、里山林と食虫植物を中心的なトピックとしたので、そのことについても下記に報告しておきたい。

① 里山林の大切さ

株立ち形態のナラが残るエリアで、里山林の大切さを説明した。

株立ち形態のナラの存在は、この場所が昔里山林として地元の人が管理・利用していた証拠だと言うこと。里山林は、明治以前から、燃料、山菜、農業用の肥料・資材の採取等利用するため人が大切に守ってきた環境で、20～30 年程度の間隔で伐採と、萌芽による更新を繰り返してきた。比較的径が細く樹高も低い樹木からなる森林形態を持ち、ここでしか生きられない生物も沢山いた。しかし、近年の燃料革命や輸入椎茸、さらには管理者の高齢化等で管理放棄される里山林が増え、薄暗い森林が増えてしまった。生き物も何処かへ姿を消し、代わりに奥山から里にはいない筈の動物が侵入して、人間との間にいろいろな摩擦が出ている。

里山は人が作った自然環境で、一度管理放棄すればなかなか元に戻らない。例えばナラの木は、ナラ枯れ等の病気に罹りやすくなるので更に荒廃が進み、生き物も住まない薄暗い荒れた森になってしまう。このようなことから、放棄は自然破壊に繋がるという事を理解してもらった。

② 食虫植物の捕虫態様について

貼り付け式のモウセンゴケの他に、挟み込み式のハエトリソウ、吸い込み式のミミカキグサ、落とし穴式のウツボカズラ、モンドリ（筌）式のゲンリセア等がある事を写真で説明した。又、ウツボカズラの消化液は、人が飲んでも大丈夫の様だと言う話をした。それは、「昔、ヨーロッパのある探検者が東南アジアに入ったが、迷ってしまい森林を彷徨った。その時、喉の渇きをこの消化液（綺麗な状態の）で潤した」と言う実話があり、実際に自生する東南アジアでは、米炊きなど日常的に利用されてもいる。

食虫植物は根から十分な栄養を取れない環境で生育するため、捕虫した虫から不足する窒

素やリンを補っている。この町民の森の土壌は、砂岩の風化が進んでいる途中でコケやシダ植物が多く、「未熟土」と言われる貧栄養状態の土壌であるため、湿地では食虫植物が生育し、他の植物は丈の低い物が多い事を説明した。

（矢下・杉山　記）

<3 班> (担当：佐野、高橋)

3班は5名の女性陣。「森町・町民の森」に来たことがない方が3名いたので、その点を考慮しながら観察を開始した。早速、目に入ったのがクロバイ。見頃は過ぎてしまっていたが、花の特徴や樹皮を観察してもらった。静岡県でも西の地域しか見られないことも付け加えた。すぐ近くにはハルリンドウも咲いていた。皆さんから「かわいい～！」の声。女性陣は、小さくて色鮮やかな花を見つけると、思わず出てしまう様である。

観察を続けると、乾燥した場所と湿った場所が織りなすように分布しているのがわかる。ウラジロとコシダの分布から地表面の湿度の違いを想像してもらった。また、ガレ場のような乾燥した場所にはマツが多く見られたので、樹木の生育環境、適地適木「尾根マツ、沢スギ、中ヒノキ」を解説した。一方、過酷な環境下では樹木は大きく成長できないことや、多くの樹木同士が支えあうことで森が形成されることも知ってもらった。

モウセンゴケ、トウカイコモウセンゴケが見られた場所では、これらの食中植物の捕食の仕組みを知ってもらった。粘着性の粘液を出して消化することや、腺毛の先端の水滴は太陽の光を受けて光り、虫を呼ぶ効果もあることを解説した。

管理道に出る手前でヤマツツジが開花していたので、花の中を覗いてもらい、蝶に受粉を頼るための花の構造について知ってもらった。皆さん、「すごいね～！」と巧みな花の構造に驚いたようであった。黄色い花、ジャケツイバラが咲いていた。「ジャケツ」の意味がわからなかったようなので、ジャは「蛇」、ケツは「結」の意味を伝えると直ぐに納得してもらえた。

管理道で、他の班が動物の糞らしきものを発見したらしく、動物専門家？の私に確認して欲しいとの声が掛かった。粒状で草食動物に間違いないが、ノウサギ、シカ、カモシカ？と私の頭の中で思考回路が作動する。ノウサギは「大福」、ウサギは「俵」、カモシカは「弾丸」の形状でカモシカは溜糞をすることを考えた結果、ノウサギのものであると断定した。糞は季節によって食べ物の種類が異なり、含水率も異なるので、色や形（粒状糞が結合している）に違いがあることを考慮しながら観ることが大切であることを知ってもらった。

観察会では、何か一つでもよいので、生き物達の生き残り戦略を知ってもらうように心がけている。今回も、いくつかの巧みな戦略を知ってもらえたので、有意義な観察会が開催されたように思う。

（高橋、佐野　記）

<4 班> (担当：越智、小嶋)

班編成が決まると一番先に出発した。理由は、ちょうどその時日差しが出てきたので『この機会を逃してはハルリンドウの可憐な花が観られなくなってしまう』と慌てて歩き出したのだ。”心配ご無用”可憐なハルリンドウはしっかりと咲いていた。足元にも咲いていて踏んだら大変と注意深

く見まわした。そこかしこに花を観ることができた。クロバイの花は盛りを過ぎていて雪をかぶった様子は見られずほぼ”雪は解けて”しまっていた。しかし、すぐ近くのクロバイの木には可愛い白い花が咲いているのが、ま近で観られたので花の構造が良く分かった。次に、静岡市近郊の里山では観られなかったガンピの花も咲いていた。ガンピは和紙の原料となり、同じく和紙の原料となるコウゾは障子紙程度だが、ガンピはもっと高級で軽くて強い油紙や模型飛行機の翼などに使うことも説明した。この森ではツクバネウツギも多く、あちこちで白い花を咲かせていた。谷あいの少し暗い道ではカンアオイを見つけて花を探すとほぼ地面すれすれの葉の裏に花を観ることができた。皆さん『地味な花だねー』と、感心していた。

クロバイやヒサカキの幼木の葉にはヒノキバヤドリギが寄生していた。ヒノキバヤドリギは常緑樹に寄生して木を弱らせてしまう話をしたが、枯れかかった枝を観て皆さん納得していた。乾燥していて背の低い木ばかりの”夕日の見える丘”からの展望も独特の風情があった。管理道に出ると小さな沢がありここではモウセンゴケが観られ、作業道の側面で水が浸みだしているところではトウカイコモウセンゴケが花や蕾を付けていた。皆さん珍しいものを観ることができたと喜んでおられた。昼食を食べたグリーンガーデンにはシランがあちこちに咲いていたがシランは植栽したものか否かの議論でもりあがった。駐車場に戻ると参加者が、コナラの実生の幼木の葉に大きな虫こぶが付いているのを見つけ『これ、なーに？!』と質問が出た。ナラメリンゴフシであることを説明したが、本当にリンゴそっくりであった。I 班同様に虫こぶを割ると中で幼虫が動くのが観察され皆大喜びだった。何とか雨に降られず観察会を終えることができて良かった。しかし、下見の時とは花の状態がずいぶん違っていて、花の観察会の難しさを思い知らされた。帰りに立ち寄った小国神社のヤブデマリがちょうど見ごろだったのがせめてもの慰めだった。

(小嶋　記)

<スナップ写真>

クロバイの花

南ゲート下での観察

マルバアオダモの花

展望の良いところでの観察

緑の競演に溶け込んで

グリーンガーデンでの昼食

トウカイコモウセンゴケ

モウセンゴケ

ガンピの花

野兎の落とし物か？

ナラメリンゴフシの断面

小国神社のヤブデマリ